

岡本韋庵『支那遊記』翻刻・訳註（その二）

有馬卓也
真銅正宏

【訳註】

十一月二日

（本稿は徳島大学国語国文学8号の続きである）

十一日。將に發して洛陽に到らんとするに、知府、詩を余に贈らんと欲す。且つ、李葆和、旅具を購ひ時を移す。因りて行くを果たさず。午前、花樹を東門外の花舗に觀る。一として目を怡^やばすに足るものなし。護送の官隸、傍らに在りて、屢^{しばしば}しば不売を陳ず。余の遠行するを欲せざるなり。今日、洋服にて出づるに、人の來り觀る者尤も夥^{おほくた}し。先に車走行し、脚下に何物あるかを知らず。或ものは水を擔^かぐ者に触れて水を地に覆し、或ものは諸器を擔^かぎて車中を覗^{のぞ}き、人の頭鼻を撲つも、大声にて相ひ笑ひ置かず。兒童の相ひ呼ぶこと、掌櫃^{てうくわい}的と称する者の如し。車に尾して來る。路傍に立ちて演劇を觀る者、亦た皆之が為^{ため}に騒動を回顧し雜遝^{ざた}す。花樹店に至り門を閉す。則ち、忽ち四壁を攀^かり、累々として頭を駢^はず。或は壁を踰^をへて來る。之を留むるも聞かず。甚だ厭ふべきなり。遂に疾駆して城に入

り、寓に帰る。行きて城中の況状を察するに、茅廬なきと雖も宏麗の屋宇も見えず。往々にして甍瓦崩落して上に草を生ふ。街路に石なく、紅塵飛揚して人の鼻口を撲つ。北京を髣髴^{ふうふつ}とす。此の日、李葆和をして汴繒の上好のもの二丈七尺を買はしむ。此の夜、陝西の盩厔^{しゅうふ}の候補知縣某と見え、筆談して時を移す。某は本、江蘇の産。父に随ひて此に住むと云ふ。人と為り誠実。余に淹留^{えんりゅう}することを勸む。曰く「此の地、禹の水を治めし時、住みし所の故址及び宋の太祖の龍亭あり。去きて觀るに、可なり」と。

（1）店主、番頭のこと。

（2）並べること。

（3）底本は「屋宇」の下に「人」字を残すが、文意により消去した。

（4）久しく留まること。

（5）底本は「太祖」に作るが文意により改めた。宋の開祖趙匡胤（在位九六〇〜九七六）。

（真銅）

一二月二日

十二日。早起す。銀一元を官隸四人の余を護する者に、半元を店人に給す。土俗を聞くに、洛南より薄し。且つ淫侈懦弱なり。然るに其の錢を要せざるを見る。殆ど廉耻なき者に非ず。其の婦人も亦た妄には人に接せず。但だ婦人の袴を着、両足を地に投じて、箕踞するは、他の処と同じきのみ。七点鐘、車を發して北す。半里なるべし。市街に出づ。池あり。東西里許。南北十町。深さ量るべからず。中央の沙堤、広さ二間なるべし。南より北に至り、界して二となす。龍亭は乃ち其の北なり。沙堤より直ちに其の下に達す。亭地は東西一丁半、南北四五十間。南方に門あり。大きき五六間なるべし。門より亭に至るに兩旁に瓦壁あり。門に入るに左右に瓦屋あり。庭中に三層の門あり。其の中門の長さ十二三間。瓦壁の厚さ一間なるべし。中央、開門す。方二間。上は瓦を用ひて之を葺く。兩端に龍頭を飾る。門内の広庭、左右に廊を回らす。正面に真武殿あり。大きき五六間なるべし。中に真武を置き、左右に羅漢を立つ。道士ありて守る。殿前の石階は、高さ三間、広さ二間。中央の磬は大理石にして平滑なり。石の多くに龍形を画す。真武殿の後ろは即ち亭の在りし所なり。高さ五六丈。煉瓦を用ひ築成す。嶄然として或は階級を設く。皆磬石龍を画すること前の如し。殿後より登る。上に亭あり。黄屋の一層、高さ三丈なるべし、長さ十四丈。亭の前、皆石欄なり。左右稍や低し。三面女牆を築く。亭中、太祖像を置く。立ちて西北を望むに、直ちに城壁に接し、人家多からず。東南は人家櫛比し、連綿として絶えず。風景、

絶佳なり。東池の中に玉皇廟あり。西池に亦た一廟あり。稍や久しくして去る。西門より出づ。茶店・割烹店等相ひ屬す。頗る殷賑たり。然れども人家多からず。時に李葆和、物を購ひ、待つこと久しきも至らず。店中、樂を奏するを見る。猪羊を輿ぎて行き、全身の皮を剥ぎ之を煮る。蓋し、特豕特羊の類の神明に供するものならん。此より西行す。沙地高下し、往々にして不毛なり。村落も亦た罕なり。二十町なるべし。一小村を過ぐ。又た三四十町。長堤あり。其の下に数家住む。堤を踰ゆるに益ます沙地多し。不毛にして高下不一なり。榆柳繁茂す。地、黄河を距つること三十町なり。河水の漲溢するに方れば、深さ三十尺に至る。往々にして塩を産す。土屋の三四尺なるを構ゆ。其の傍に、土を平らげ水を灑ぐ。人民、生計困苦して性情亦た涼ならずと云ふ。又た行くこと三十町許。太伯庄に至る。午餐を命ず。時に午後一点鐘。又た行くに、地勢初めの如し。二小村を過ぐ。月光に乘じ中牟に至る。沙地なし。樹木相ひ望む。中牟の南、十町外に一小河あり。小黄河たり。広さ三三間。橋を架く。其の深さを知らず。中牟城は周圍七里余、人家千余あり。此夜、土人、余の至るを聞きて、來り觀る者甚だ衆し。煩はしきに堪へずして戸を閉す。衆戸を叩き、看々と呼びて止めず。余怒りて之れを逐ふ。相ひ踏躓し、且つ倒る。中に一人盛服にして來るあり。見えて之れに問ふに則ち官吏なり。人家の多少を問ふ。惟だ曰く「甚だ多くして其の数を知らず」と。其の人、余の国名を問ふ。書して日本と曰ふ。其の人曰く「日本は是れ国名か」と。余曰く「然り。子、官吏たりて日本を知

らず。何ぞ迂なりや」と。其の人黙して去る。

(1) 心が正しく恥を知る心。

(2) 両足を前に伸ばして座ること。

(3) 櫛の齒のようにすきまなく並ぶ様子。

(4) 道教での大帝。

(5) 底本は「時」の上に「一」字を残すが、文意により消去した。

(6) ふみにじること。

(7) 礼式にかなった立派な服。

(斎藤)

十一月三日

十三日。早発す。土人の来り観る者、数十人。官渡城⁽¹⁾を問ふ。曰く「城なし。橋あるのみ。此より距つること八里」と。孔廟を街衢⁽²⁾の傍らに見る。顧みて過ぐ。城より出づれば、勢、高平なること昨の如し。問て岡阜の状を做すものあり。土性、膏腴にして、耕耘、頗る力む。行くこと四里なるべし。四小村を過ぐ。七八百家あり。白氏街たり。午前は此に休す。飲食は清潔にして、卓に倚りて字を書するも、汚垢に患はず。又た行くこと二十町なるべし。三百余家あり。仙橋たり。又た三里なるべし。四小村を過ぐ。鄭州に達す。此の際、地氣肥磽にして、樹木多し。西方、小山の東西に連なり亘る。山下の村落、風景観るべし。鄭州は周圍十二里、人家三千余と称す。東門より城に入る。人家は古製にして綺麗なり。行くこと二三丁。路の左に子産⁽³⁾の祠あり。二小門⁽⁴⁾の扁額、左に「惠人祠」と曰ひ、右に「循良祠⁽⁵⁾」と曰ふ。進みて祠に至る。高さ二間なるべし。広さ

三間。前に厦あり。左右に各おの二室を列す。左室は子産の像を安し、右室は像なし。人の住するものの如し。廟より出でて街を行く。婦女の容色ある者を見ること甚だ多し。男子も亦た美なり。想ふに、古時の淫風⁽⁶⁾、亦た此の尤物の多きが為ならん。夜に入りて、西門の外に宿す。人の来りて菓を鬻ぐ者あり。或ひと、烟管を齎ち来りて煙を喫せしむ。風俗の他に異なるを微らかにするに足る。

(1) 河南省中牟県の東北にあつた城で、後漢末に曹操が袁紹を敗つた所。

(2) まちのこと。

(3) 春秋時代の鄭の名宰相。

(4) 底本は「門」の下に「在」字を残すが、文意により消去した。

(5) 法に従つて善良なこと。

(6) 原文は「淫」を「淫」に作るが文義により改めた。また「淫風」は、財貨や美色をむさぼり、遊びふける風潮。

(7) すぐれた人や物、或は美人のこと。

(有馬)

十一月四日

十四日。西南のかた行く。四顧するに高平涯なし。村落相ひ望み、樹木多し。道路地より低きこと二三尺、広さ二丈なるべし。行くこと一里半。西稍や北す。道漸く低く、左右漸く高し。始めは七八尺より一丈に至る。愈いよ進むに愈いよ低し。広さ三四尺なるべし。両旁は巖土壁立して屏障の如し。行く者は日光を見ず。土人称して溝路と呼ぶ。十町許して溝路断じ、一村

出づ。四面に土壁を環す。二百余戸、焉に住すと曰ふ。是れ三官廟たり。河南地方の大村、必ず土壁に囲まると、山東に異ならず。皆、賊を避くる爲なり。此を過ぐるに又た溝路たり。深さ四五丈、広き前の如し。行くこと六七町、河傍に出づ。此の河、井水たり。右顧するに、一溝路の前路の南に在り。相ひ距つること僅か五六間、車馬皆焉に由る。河は東北に向かひて流る。深さ一尺半なるべし。広さ三四間。河傍に七八十家あり。小井水たり。地勢、極めて高下す。道路屈曲し、東北に走る。地より低きこと七八尺。人家皆其の傍らに在り。地を占むること一ならず。壁を周し樹を列す。甚だ他処と異なる。此を過ぐるに又た溝路たり。行くこと五六町。路、分かれて二と爲る。左路を取り高土に出づ。一村を過ぐ。地勢高平なること方二三里、南西北漸く低く、樹木歴々として数ふべし。行くこと十町許。又た一条の溝路あり。一望平遠の地なり。此の溝路あるは何ぞや。又た行くこと十町許。百余家あり。西菜市たり。此を過ぐるに又た溝路あり。始め狭く終り広し。十町にして、須水鎮に達す。人家六百、土壁を周す。高さは城壁を過ぎ、上に女牆あり。門の左右に石を用ひ煉瓦の樓櫓を構ふ。南方に門あり。壁に沿ひて南東より西北に転じて行く。人家連綿たり。壁下より行くこと七八町。小流あり。圮橋を架く。即ち鎮の北門なり。門外の人家相ひ属して橋を渉る。一店に就く。鄭州より四十里と称す。午牌又た西北を指して行く。又た溝路あり。地より低きこと二丈なるべし。行くこと三十町。一小村あり。宅地凹にして四面に田、頭上に在り。四通せる左右の道路、総て窪下た

り。深さ或ものは二三丈に至る。此を過ぎて行くこと四五町。路漸く高く、四望自在なり。行くこと三四丁。又た漸く窪下たり。深さ二丈なるべし。広さ一丈弱なり。

(1) 底本は「低」字が消し忘れて重複する。文意により消去した。

(2) 底本は「者」字が消し忘れて重複する。文意により消去した。

(3) 敵の状態を望み見るためのやぐら。

(4) 土の橋。

(5) 窪んで低い所。

(真銅)

又た二十五六町。三百余家あり。二十里鋪たり。四囲土壁にして地頗る窪下たり。村路の泥寧凝結す。過ぎて行くに路旁の岸下、土壁崩壊す。想ふに昔時、人家のありし処ならん。又た行くこと二十町なるべし。地漸く低く路愈いよ窪む。地より低し。低きこと三四丈。兩岸相ひ距つること上は十間、下は崩墜堆積す。又た行くこと里許。地益ます低し。以為らく坦途たり。忽ち又た溝路あり。深さ一丈なるべし。漸く深し。一里半。柴陽に達す。城、窪下に在り。四面城地より高し。城の東に人家相ひ連なる。其の南丘に堂あり。其の下窪下たり。左右皆樹木あり。人家其の間に粧点す。城の西南に小河あり。深さ五六寸、広さ二間なるべし。清潔にして飲むべし。城の形、方正ならず。近く修を加へし結構あり。城内の街路樹木を列す。而るに清潔ならず。人家宏麗なるもの甚だ少なし。薄暮西門を過ぎ、鴻溝・成皋・廬山・敷倉等の河陰に在るを聞く。月光に乘じ、將に

其の地に到らんとす。衆に里程を問ふ。有ひは二十里と曰ふ者あり、有ひは三十里と曰ふ者あり。未だ詳かならず。日既に暮れ遂に此に宿す。須水鎮より三十五里と称す。此の地人家二千四五百戸。城囲十二里余。須水鎮より此に至るまで、渾にして高平し、村落の樹木羅列し、景況相ひ似る。一山東北より起ち、西南に至る。山脈或は高く或は低し。数里に連なり亘る。中に最高のもあり。五六里に在るものの如し。蓋し嵩高山脈ならんと云ふ。

(1) 漢の高祖と楚の項羽が天下を二分したときの境界。今の河南省の賈魯河。

(2) 今の河南省成皋県の北東にある山。楚の項羽と漢の劉邦が対陣した所。

(3) 今の河南省成皋県の北西の敖山の上にあつた穀物倉。

(4) 黄河の南。

(5) 五岳の中岳。河南省登封県の北にある山脈。 (斎藤)

十一月十五日

十五日。四鼓。車声の軋軋^①なるを聞きて喚起す。馬夫、月の明るきに乘じて西す。城外に至りて、人家の尽くる処に門あり。門より出づれば忽ち溝路たり。地より低きこと七八丈。上は広さ十五子なるべくして、而して下に二條の路あり。一は車路にして最も下に在り。広さ一子なるべし。一は其の右面の上に在りて、広さ馬を通すべし。兩岸に矮草小木を生ず。行くこと二十町許。地、稍や広きも、四面皆高土にして、溝路四通す。南岸の傍らに一廟あり。左右、樹木鬱蒼たり。此を過ぎて溝路、

深きこと前の如し。三十町なるべし。地、漸く低し。田の路より高きものも、丈余に過ぎず。又た十丁許。一村あり。四面、皆宅地より高し。路を夾みて二十家許あり。樹木扶疎として、雅致あり。又た行くこと二十丁許。溝路の広さ七八尺なるべし。深さ丈余より二三丈に至る。一処に人の穴居する者あり。又た行くこと二十四五丁。右旁に二十余家あり。白馬寺^③たり。此を過ぐれば、地勢、前の如し。行くこと十四五丁。兩岸に柿・槐・柏・梧桐等を列し植う。其の西の辺り、一百二十余家あり。二十里鋪と曰ふ。此より溝路、深さ丈余、広さ之に称ふ。三十丁。一百余家あり。白氏たり。人家多く岸に在り、傍らに樹木繁茂せり。風景、賞すべし。更に行くに五六家あり。其の傍に神応王^④の廟あり。蓋し扁鵲^⑤を祭るものならん。四周土壁に落ちて、中に樹木多し。祠宇荒廢し、土像は頭落ち、耳目口鼻皆剝落して、見るに堪へず。又た溝路を行くこと一丁半。左右に岐分す。右路より行くこと四五丁。右旁に一村あり。土壁に圉まる。左折して田の傍らに出で、溝路より上を行く。数里の外を南望するに山脈蜿蜒^⑥す。北方の数里も亦た岡阜の連なり亘るあり。其の他は一望平坦にして、村落、樹木頗る多し。四五十千南のかた、更に一大溝路あり。此の溝と同じく、西に向ひて走るものなり。行くこと三四町許。又た溝路に入る。始、深さ一子、或は二三子。路の広さも亦た二子に垂なんとす。地漸く低く漸く深く且つ狭し。後、四五丈より七八丈に至る。僅かに車を容る。右に又た一條の溝路あり。来り会する者は上に人家ありて居住す。下より之を望むに、五六丈の上に築壁ありて、直

だ溝路を枕するのみ。人をして惴慄せしむ。置かずして此の兩岸を過ぐるに、土壁、益ます峻にして、殆ど十丈に垂なんとす。兩岸狹窄にして、屹立すること斬らるるが如し。其の底を行くに頗る暗し。上を見るに甚だ小なり。更に行くこと五六丁。平地に出づ。其の東南西の三面は悉く岡陵を環らし、崖岸往々にして出入す。其の中に一河あり。南岡の下に流るるは、是れ汜水たり。北方は即ち黄河なり。道路は東岡の下にあり。西北のかた十四五丁。左に数十家あり。山に沿ひて居住す。岡上に又た一廟あり。遙かに門及び磴道を望む。極めて狭小なり。樹木の間にありて頗る風致あり。問ふに「天爺廟なり」と曰ふ。

(1) 車の走る音。

(2) 木の枝葉が繁茂しているさま。

(3) 中国最初の寺。後漢の明帝の時に建てられた。

(4) 神が感応した者を一般的に言う。

(5) 黄帝の時代の名医の名。戦国末にも扁鵲と呼ばれた名医がいた。

(6) うねうねと屈曲しているさま。

(7) 臨む、見下ろすこと。

(8) おそれおののくこと。

(9) せまくて窮屈なこと。

(10) 高くそびえ立っていること。

(11) 天帝のこと。

更に一土塘を踰ゆ。人家路を挟みて連綿とし、汜水県に接す。

城壁は南山より北山の嶺を囲む。城牆高く山上に聳ゆ。行くこ

(有馬)

と四五丁。一店に休む。九時なり。蔡陽県より此に至るまで、五十里と称す。食し畢りて、成阜・広武・敷山及び漢楚の古戦場等を觀んと欲す。李葆和を携へ、城に入る。東山より下に、一高閣の北岡に聳ゆるを見る。門に題して大和殿と曰ふ。蓋し道士の守る所ならん。閣上より西南を遙望するに、山脈宛委たり。我が富士に似る。是れ仏山たり。成阜を問ふ。則ち此の山是れなり。又た西より東に連なるものを指して悉く成阜と爲す。敷倉を問ふ。則ち黄河の漂没する所と爲る。今既にあることなし。県治の北、文廟の前を指す。広武は、則ち東北の隔山を指して、目に入るものとす。敷山は則ち知る者なし。漢楚の古戦場は東北のかた三里に在りと云ふ。又た溝路より往きて、唐人の二石碑あるを觀る。蓋し平賊の事を纏述せしものならん。旁らに楚の王宮あり。因りて李を顧みて漢楚の旧蹟を探問するに、西北の広武山を指して之を示す。遂に街市を経て旅店に帰る。県城の周圍は九里余、人家八百余あり。中に空地多く、居民は三分の一に過ぎず。午後一時、店を発す。左転して二丁許。又た右折し、汜水に沿ひて行く。三四丁。津を渡る。西岡に傍ひて北に行く。七八町。又た右折す。人家数十あり。其の一处の門に、題して成阜書院と曰ふ。或は、此の処、漢楚の古戦場なりと曰ふ。西南に行く。兩岸の間、其の広さ五六十丁より二三十丁に至る。悉く土田たり。兩岸は出入屈曲し、中に溝路あり。西北に向ふ。三十町許。右転するに又た溝路たり。深さ四五丈、上の広さ三千許なるべし。下は僅かに車を通す。漸く行くに漸く高くして、深さ漸く減ず。路上に圮橋を架け、人家を構ふる

者あり。行くこと十丁許。田の傍らに出づ。左に一条の深き溝あり。一跌し、其の下に顛墜するを恐る。甚だ危し。一丁許。忽ち又た溝路たり。深さ一丁、広さ之に称ふ。四五丁。田野に出づ。四望するに諸処に深き溝あり。樹木溝底に生茂す。又た五六丁。溝路に入る。其の大なること前の如し。二三丁。漸く深し。其の最も深きものは、三丈を過ぐ。南のかた行くこと六七丁。地、漸く高く、溝、漸く浅し。西南のかた、又た三四丁。右折せし処に、人家百余あり。潘家窟たり。此の地を過ぐるに又た漸く高し。溝路深さ三丈なり。七八丁。又た漸く低し。更に三四丁。右顧するに、深き溝あり。十余丈なるべし。其の余の溝路縦横たり。又た一丁許。左顧するに、深き溝あり。更に二三丁。一高処に出づ。左方は壁なし。又た二丁許。溝路を過ぐるに一村あり。名馬溝たり。二百余家あり。壁に倚りて廬を結ぶ。西南のかた行くこと六七丁。諸処に塗壁の痕を見る。更に行く。溝漸く深く、路漸く狭し。深きものは三丈を過ぐ。上に土人あり。壁上に住む。其の家は見えず。唯、柿樹柏樹等あるのみ。南のかた、行くこと五六丁。高き処に一廟あり。天仙廟と曰ふ。結構頗る美にして廟の辺りの溝は浅く、路広し。

(1) ゆるやかな曲がり方のこと。

(2) 賊を討ちしずめること。

(3) つまづくこと。

(真銅)
此より西南に三四丁。溝路漸く深く、地漸く低し。又た三四丁。南に向ふ。溝の深さ三丈余。地漸く高く、路益ます狭し。又た六七丁。溝漸く浅く、地亦た漸く低し。又た二丁許。左右に深

溝を望む。更に西南に二丁許。溝漸く深し。二丈五六尺を計ふ。更に三丁許。益ます深し。西南に向かふ。深さ六七丈に及ぶものあり。更に一丁許。或は壁一方は高く、一方は低し。或は土を運び之れを補ひ、或は左右壁なし。地漸く高く、宜しく四方を望むべし。五六丁。一嶺を踰ゆ。南望するに大壑あり。其の南一里の処、山脈北方に横亘す。北に至り漸く低く、黄河、二三里の外に映帶す。此より西行すること三丁許。左壁の高さ二丈なるべし。右壁は人工に係り、丈に過ぎず。又た西に二丁許。右壁丈余なり。左壁も人工に係る。更に一嶺を踰ゆ。左右の壁、皆人工にして高さ四五尺なるべし。此を過ぐるに左方に壁なし。深大なる壑を臨む。壑中、岩石突兀す。西に行くこと二丁許。右方に壁なし。深大壑を枕するに、壑中に柿樹多く、名処に点綴す。更に行くこと一丁許。左に壁なし。一丁許。右に小壁あり。地益ます高し。左方の山上に寨あり。寨の下、門あり。鞏関の二字を鐫る。関内の壁、高さ三丈或は一二丈にして等しからず。亦た人の築く所の高さ四五尺なるものあり。二丁許。寨を出づ。右に壁なく、山田陡絶す。又た二丁許。左右に壁なし。左面の地甚だ深し。山上、之を望むに四面の高低一ならず、凸凹殊に甚し。山田⁽⁵⁾鱗次す。上下の階級、皆甚だ狭少たり。樹木多からず。其の下に洞穴あり。甚だ多し。蓋し貧民の住居及び耕夫の雨旱を避くるものならん。四五丁。絶頂を⁽⁶⁾度る。右に壁あり。高さ一丁半なるべし。人築に係るものなり。更に西に二三丁。両旁稍や高し。上に一石碑を建つ。日暮れに逢ひ、弁知すべからず。是れ第一の高処たり。此より一丁許。下に人家数戸あり。

左壁に倚りて屋を結ぶ。西を指して下る。両傍壁立すること二三丈なり。十丁許。左折して行く。又た十町許、右方に壁なし。悉く山田に係る。更に右転して行くに閤あり。左方に壁なし。石礫多し。頗る嶮峻たり。車躍し馬尾を衝く。馬の路上に倒れること二次。力を極めて扶起し、車を扣して徐行す。又た六丁許。両傍壁立す。二丈なるべし。愈いよ下り、愈いよ高し。凡そ三丈内外なるべし。二十丁許。壁なく道路平坦なり。十五六町。左転し右折す。或は壁なく或は壁あり。七八町。又た両壁の間に出づ。高さ二丈なるべし。又た十丁許。左転するに人家あり。更に西南に向ふに皆溝路たり。深さ二三丈なり。十四五丁。鞏県の北環に出でて東南より街中に入り宿す。時に第九時なり。此に着せし時、河水の明滅するを右望す。船舶輻輳し、燈光水に映る。即ち洛水中の船なり。此の夜、夏台を訪ぬ。答ふるに則ち三十里外に在りと。宋の太祖仁宗等の陵を問ふ。則ち皆三四十里の外にあるなり。

(1) 大きな溝。

(2) 景色の色どりが映えること。

(3) 山などの高く突き出るさま。

(4) 底本は「右」字が消し忘れで重複する。文意により消去した。

(5) 底本は「鱗」を「麟」に作るが文意により改めた。以下すべて同じ。「鱗次」はうろこのように多くのものがならび連なること。

(6) 夏王朝の牢獄の名称。

(斎藤)

十一月十六日

十六日。夜来の疲労に由るを以ての故に早起するを得ず。午前七時、始発す。街を過ぎて城東の田間に到る。四顧するに、東西二十町、南北三里許、皆平坦の地なり。東南は周く岡陵なり。上下の早田、重疊鱗次す。其の後、遙かに山脈の連なり亘るあり。又た山の西北より東に向ひて走るあり。洛水は西南より東北に來りて流る。惟だ東北の一处のみ開濶す。行くこと二十町許。縣城の南に至る。城壁は経直なるものあり、斜垂なるものあり。周圍十二里と稱す。其の中に住む者、二三十家に過ぎず。蓋し水地にして住むべからざるなり。城外に八九百家あり。然れども縣治は常に城内にあり。城南に人家數十の山に傍ふものあり。此より西南のかた三十町許。兩岸壁立す。始めは相ひ距たること十間なるべし。中は漸く進み漸く狭く、終りは八九尺に過ぎず。壁の高さ四五丈。三十町なるべし。溝路、稍や浅し。間に壁なきものあり。稍や開濶して四方を望むべし。左方に一大溝の東北に走るものあり。東南のかた二三里の外に大山脈の西南に向ひて屹立するを望む。更に行くこと二十町許。地勢、初めの如し。二三条の溝路の、左右より來り会する者あり。其の間に兩三家の壁を穿ちて穴居し、飲食を鬻して巢実するものあり。又た小路多く、壁上を往來す。蓋し壁上に人家あらん。二十四五町許。路の右に閤帝廟あり。其の上に穴壁ありて、住む者、二家あり。此より地、漸く低し。十丁許。二三家あり。地勢、稍や開濶す。高下一ならず。石礫の多きこと甚だし。中央に磧あり。東西六町、南北二丁半許。更に進みて南す。

左右、或は壁なく、或は壁あり。高低一ならず。二十丁許。一村あり。青石関⁽⁹⁾たり。皆、穴壁して居す。壁の左右上下に柱を立てて門戸を開闔す。又た別に小穴を穿つ。家内の状を知る由なし。外面より窺ひ見るに、甚だ広く且つ深きものの如し。穴居は壁の上下に在り。蓋し壁の高きを以ての故に、相ひ妨ぐるを致さざるなり。此の処の南北一里、東西七八町、悉く平地たり。洛水の南より北に赴くの処、稍や開濶して、其の他は山岡を環る。東北の山上に土壁を周らすものあり。其の他の村落は山に沿ひて相ひ望む。路の旁に白楊・柿樹・柏樹、相ひ間生し、頗る風致あり。

(1) 底本は「得」を「得」に作るが文意により改めた。

(2) 陸田のこと。

(3) 幾重にも重なっているさま。

(4) 底本は「東」字の下に「山」字があるが、文意により消去した。

(5) 広くひらけているさま。

(6) 縣の役所のこと。

(7) 三国時代の蜀の名称である関羽をまつる廟。

(8) 底本は「多」字が消し忘れて重複する。文意により消去した。

(9) 開閉に同じ。

更に行くこと二十町許。洛水の傍らに出づ。暫く停車し、風帆⁽¹⁾の河を浜⁽²⁾るものを眺望す。七八十石を載すべし。河傍に十余家あり。河を枕す。皆客棧にして食物を鬻ぐ。此の地の東南、山

(有馬)

を環らす。南端に寺院の如きものあり。其の南は水を枕するの処なり。半山⁽³⁾以下、黒石疊積し、甚だ大なり。村中樹木多し。是れ黒石関⁽⁹⁾なり。村前より洛水を渡る。水の広さは一丁半なるべし。黄濁水にして、深きものは六七尺許に至る。河中往々にして州渚あり。河旁の磧は広き一丁なるべし。西岸上に人家二三あり。午餉を命ず。畢りて又た南西を指して、河に沿ひて行く。二十町許。河勢一転して西向す。山も亦た西に走る。大なる石の遍く路上に敷かるるあり。門あり。「堰師県東界」と題す。門内に二百余家の村あり。是れ史家莊なり。村を過ぎ、伊尹⁽⁴⁾の墓を訪ぬ。護送の官隸、右旁を指示す。往きて觀るに則ち、清人王文安公諱某の墓なり。前に人形・麒麟・獅子等の像を列す。又た行くに、兩岸壁立す。一村あり。水家灣たり。北山に倚り屋廬を結ぶもの一千余、東西十四五丁に連綿す。洛水の五六町の表に在るを南望す。田間、多く桃樹を植う。桃、名産たり。価太だ廉と云ふ。又た種々の葉草を産す。此の間、南に高山を望む。北も亦た一山あり。洛水、中間より流る。地勢広闊、風景極めて佳なり。午後、東北の風、塵土飛揚し、遠近するあたはず。更に行くこと里許。偃師県の東に至る。人家各処に散在す。一大墳を望む。前の路左に柏楊の三四株あり。皆合抱以上なり。墳上、柏樹森然たり。則ち王弼の墳たり。周圍二百歩に垂んとす。高さ二丈たるべし。此れ、陸子龍の少年と易を談ずる処と云ふ。日暮れて偃師県に達す。城壁の周圍十二里余、人家四千余あり。人家、間ま宏麗なるものあり。夜、西門に宿す。

(1) 風を孕んだ帆のこと。転じて帆船。

(2) 邇に同じ。

(3) 山の中腹。山腹。

(4) 殷の湯王の相。阿衡と呼ばれた。

(5) 三国時代、魏の国山陽の人。『易』及び『老子』の注が現存する。

十一月十七日

(真銅)

十七日。早旦、伊尹の墓を訪ぬれば、則ち西北八里に在りて、行くを果たさず。嵩山を觀んと欲す。南稍や東を指して行く。午前、府店鎮に到る。申牌、三家店に到り宿す。僊師より府店鎮に至るまで四十里と称す。楊村・堂坊口・虎渡等の諸処あり。僊師・楊村の間一円平坦たり。東西稍や広し。南北三十丁なるべし。村落遠近に相ひ属す。道傍は往々にして白楊樹を列植す。田土赤埴たり。楊村は洛水の南に在りて洛を枕す。二三十家あり。飲食を鬻ぎて船客を待つ。河岸の風景賞すべし。之を往来する船頗る多し。始めて竹筏を見る。竹围六七寸に過ぎず。河の深淺を問ふ。則ち人身より深しと云ふ。河中州嶼多し。深き処五六間に登らず。岸上に立つこと稍や久しくして去る。土人の来り觀る者甚だ多し。後に至るを恐る。梶を持ちて食し、且つ走る。堂坊口の人家五百なるべし。岡を負ひて諸物を鬻ぐ者あり。楊村より行くこと約三十町。平坦なること前の如し。堂坊口の傍に至る。岡陵断続し地勢高下す。間に窪路あり。堂坊口より南して虎渡に抵る。三十町、皆山岡にして、往々にして凸凹たり。両崖壁の高さ一丈に及ぶものあり。中央に景山あり。

虎渡より府店鎮に至るまで六七十丁にして、始めの二三十丁の間、地勢漸く高く、且つ路旁の大半壁立す。西方五六丁外に大墳の累累として並列するものあり。太子の墓と曰ふ。何れの太子か問ふ。則ち趙と答ふるのみ。蓋し宋家の子孫ならん。東南のかた十丁許。二三の店家あり。此を過ぐるに地勢高下し、道路屈曲す。府店鎮は人家千余あり。午餐を命ず。人の来りて觀る者甚だ多し。互ひに相ひ压倒す。童児声を揚げて大叫す。三家店に六百余家あり。府店鎮より距つること十里と称す。

(1) 午後四時。

(2) しまのこと。

(斎藤)

地勢凹凸し、道路狹隘にして石多く、車の動揺すること甚だし。東南のかた二十七八丁なるべし。乃ち西南に向ふ。又た二十町余。東南に向ふ。地勢漸く高し。又た十余町許。一高处に至る。店あり。店の東南、三家店の十余丁に在るを望む。其の東南は即ち嵩山の山脈なり。山田鱗次す。其の下に一長溝の西北に向ひて頗る深きものあり。旁に崖岸の並峙するものあり。画図の能く及ぶ所に非ず。蓋し成阜より此に至るまで、最も此の類多し。府店鎮を過ぐるに、馬の石炭を負ふものの甚だ多きを見る。李葆和をして之を問はしむ。則ち曰く「此より距つること二十五里に張溝あり。其の地、石炭を出す。之を焼けば即ち潔白たり。房中に石炭を焼けば、房に満つるもの皆白し。価、極めて賤し」と。十余町許。老槐樹あり。扁額、「靈応」の二字を書して之を樹身に縛す。之を問ふに即ち「槐樹に邪神ありて、人民に病あらば、之に祈らば即ち愈ゆ」と曰ふ。其の西に

一小山あり。樹木扶疎たり。是れ望嶽山たり。山上に樓あり。名は望嶽樓なり。康熙帝の築きし所なり。是の日は午前曇りて、嵩高の諸山は、煙霞中に在り。午後漸く晴れ、諸山、真面目を呈す。嵩山の大勢は、東北よりして西南、漸く高く、絶頂に至る。西南の一面は、巖然として斬らるるが如し。其の質は皆、大巖の疊成するに係るものなり。其の前に一山あり。其の西に更に一山の頗る高峻なるものあり。遠きより之を望むに、嵩山と相ひ列して、幾んど優劣なし。山頂は広濶にして、中央高くして左右低し。是れ玉帶山なり。又た其の西に一峯の突起するものあり。蓮花山なり。其の西に更に三峰の並峙して突兀し、天に聳ゆるものあり。藕心山なり。此より西方は、山勢起伏し、連なり亘ること甚だ遠し。西北三四里の外を瞻望するに、濛濛として烟氣の中に在りて、更に一物の目に入るなし。方三四里の間は、日光輝灼して、一般の秋景を覚ゆるのみ。直ちに登封に赴かんと欲するも、日の暮るるに會し、遂に宿す。李葆和をして山輜を雇はしむ。往来に二千文を要す。李、八百文を与へんと欲するも背へんぜず。遂に二千文を給するを約す。

(1) ひときわ高くそびえる様。

(2) 遙かに仰ぎ見ること。

(3) 雨や霧などで、けむるように薄暗いさま。

(4) 山を行く時のための輿。

(有馬)

十一月八日

十八日。早起す。店人をして山輜を促さしむ。店人曰く「五鼓には、必ず人の往来する者あり」と。未だ五鼓に至らず。山

間、狼の出づるあるを恐るるなり。時を移し、漸く人馬の声を聞く。因りて、急ぎ之を促す。即ち椅子と二条の棍とを齎して来る。棍を椅子の左右に縛る。棍の前後も亦た麻繩を縛る。使ひて擔ぎ行くべし。以て山輜に代う。三家店を發し、山を循りて行く。山路の磐石、荒穢にして修せず。大小の犖确あり。左に一大壑あり。俯瞰するに甚だ深し。壑底、率皆耕地なり。行くこと里許。一嶺を踰ゆ。是れ、輾輳嶺なり。傍らに一神廟あり。廟を過ぎて兩山の間より行く。地、漸く低く、路、左右に分かる。右路より山に沿ひて行く。里許。少林寺に抵る。時に天漸く明し。南望するに、大史山・小史山の相ひ連なること屏障の如し。仰瞻するに甚だ峻絶たり。西南の少室、西北の太室の二山、一脈にして、聳出す。高さ十町なるべし。大史・小史の二山の高さに如かず。小室山の北、太室山の東に更に峯形を成すものあり。其の東に更に山の相ひ対するものあり。又た東南は即ち嵩山なり。西北面は岩石の岌々として、諸山に秀出す。大少室山と嵩山との間、約一里なるべし。大室山と太史山との間、七八丁に過ぎずして。少林寺は則ち太室山を負ひて太史山に面す。前に乾谷一条あり。地、石多く、耕田極めて瘠薄なり。甚だ眺望宜し。達磨、居を此に択ぶは、煙霞の癖ありと謂ふべきなり。寺に、柏樹・白菓樹・椿樹・楊樹等の類、森然として林を成す。其の下に院あり。達磨堂は中央に在りて南面す。往きて観る。門の外を除きて、大殿六宇あり。其の第二殿は大宝殿と称す。兩層の屋にして三大仏を安す。旁らに諸仏を列す。第三殿は達磨を安す。其の前に一仏あり。状兒儼然たり。

殿内に乾隆帝の納むる所の仏經数千卷あり。其の他、多く
仏像を安す。最後に達磨堂あり。達磨の常居せし所と云ふ。
中央に達磨像を安す。左面に阿弥陀仏像あり。蠟石を以て之を
作る。某太子の造りし所の一千仏の一と云ふ。右面に面壁石あ
り。高さ三尺、広さ一尺五六寸なり。前面に達磨の像あり。宛
然たるは、達磨の一心、石中に貫徹し、然るに致ると云ふ。殿内、
往々にして凹窪の処あり。達磨の足跡と云ふ。殿の高さ四五間、
長さ十間許なり。余の殿は皆此と伯仲す。但し二殿三殿は最も
大にして、殆ど孔孟の廟に垂ぐ。金銀朱碧の飾り、一等を譲る
のみ。殿の旁らの石碑に達磨の功德を紀するもの極めて多し。
大宝殿の旁らに、三大仏の状兒孺惡にして怖るべきを安す。何
の像たるかを知らず。殿前に白菓樹あり。囲、三抱を過ぐ。枝
葉甚だ繁茂せり。槐樹・柏樹列を成す。

(1) 時報の太鼓。転じて時刻を示す。

(2) 携え持つてくること。

(3) 山に大きな石が数多くある様をいう。

(4) 禪宗の元祖。？々五二八？。インドから中国に来て、嵩
山の少林寺で面壁九年の修養をした。

(真銅)

寺院、數十字、の仏殿の側に相ひ列する在り。見るに足るもの
なし。此の寺、嘗て住せし僧五百人にして全国第一と称す。現
今、困窮し去る者大半と云ふ。寺僧、余を導き諸殿を開け佛像
及び諸器物を示す。徧閱するに遠あらず。余、衆に告げて曰く
「余、大師の九年面壁の洞を觀んと欲するなり。則ち我に於て
足れり」と。寺僧、仰首し太室山の西北を指して曰く「此よ

り距つること四里の路なり」と。即ち轎夫に従ひて一村を過ぎ
山下に至る。一山皆大岩石なり。甚だ峻たり。細蹊あり。僅か
に狐兔を通すのみ。殆ど攀登すること難し。中止するに忍びず。
止まりて皮履を脱ぎ襪を着し岩の穿を攀る。汗を拭ひて且つ行
く。遂に洞に達することを得。洞前の空地、方二疋なるべし。
佇立し下瞰するに惴惴たり。唯だ一たび跌くを恐るのみ。洞、
大岩壁立するの下に在り。其の前に石門あり。高さ一千余なる
べし。上に題して「玄默処」と曰ふ。明代に建つる所なり。洞
旁に二石碑あり。一は明代の建つる所に係る。一は則ち清人た
り。洞の高さ一丈二三尺。奥に至り漸く低し。広さ之に称ふ。
洞中の黒石、平滑ならず。処処に壁を塗りて黑白相ひ間するの
痕あり。上に達磨の石像を安す。石を以て之を作り、土、之れ
を潤色す。外に向かひて壁に面せず。面前に幕を垂る。洞口別
に石を用ひて之れを築き上に半円形をなす。高さ五六尺なるべ
し。左に一小穴あり。囲五尺なるべし。其の状洞の如し。深さ
三丈を踰ゆと云ふ。洞前に椿樹一株あり。囲三四尺なり。又た
石門の左に桑樹一株あり。葉既に落つ。傍の寒岩大いに達磨の
氣象に類す。此の際の四山、一樹も見えず。惟だ此の二樹ある
のみ。頗る山に顔色を添ゆるを覺ゆ。低徊徘徊し眺望して止ま
ず。以為らく、達磨も亦た必ず屢しは洞外に出て風烟を賞する
の樂あらん、と。良や久しくして去り又た寺に抵る。寺僧
粥を煮る。食するに頗る美し。三碗を尽くして一干文を投じて
去る。山轎に駕し將に嵩巔に登らんとするも雨に会ふ。衆に至
りては、行くことを欲せず。余奮起して曰く「一人登るも可な

り」と。衆亦た異論することなし。遂に東南を指して郭店に到る。左転して七八町。永臺寺に抵^{いた}る。寺は嵩山の下に在り。寺内十余字の大半は残破す。金蓮花あり。達磨の植うる所なり。或ひは毎歳開花し或ひは二三年を間して一開すと云ふ。路の登るべきなし。衆將に故処に帰せんとす。余、怒り轎夫を叱り去らしむ。歩いて行く。郭店の旁より東南して、登封に向ふ。郭店は少林寺より距つること二十町に過ぎず。人家五六十あり。西に小流あり。流れに沿ひて行く。里許。右方に蓮花山あり。即ち太史山の南面なり。山勢頗る高し。巔より半腹に至るまで、大岩の屏風を列するが如きもの二三条あり。其の間甚だ深し。望むべくも行くべからず。煙雲巔に籠る。往来断続するも止まず。最も偉觀たり。更に行く。又た一村あり。十里鋪と称す。人家百余あり。此より二十余丁。一高处を踰ゆ。又た三十丁許。登封に達す。時方に三時。「嵩山の絶頂は幾里か」と問ふ。則ち曰く「二十里」と。宿せんと欲するも西関に好店なし。城中を問ふに曰く「夜間、閉門し、早発に宜しからず」と。遂に東関に抵り宿す。登封城の周圍八里と称す。人家一千八百余あり。郭店より嵩山を環りて来ること凡そ二十里と云ふ。

(1) 底本は「攀」字の下に「大」字が消し忘れで残る。文意により消去した。

(2) 底本は「椿樹」の二字が消し忘れで重複する。文意により消去した。

(3) 色彩。

(4) さまよい歩くこと。

(斎藤)

十一月十九日

十九日。雨晴る。天色朗然たり。五更、起ち、行衆を促す。皆曰く「中嶽廟は未だ開かず」と。時を移す。余、罵りて曰く「吾、中嶽の絶頂を觀んと欲するなり。何ぞ門を問はん」と。遂に發して東行す。里許。東嶽廟に達す。三百余家あり。廟を過ぎて門の開くを見るも入らず。直ちに東北し、山田の間より登降して過ぐ。天、漸く明けし後、蓮花山を顧みるに、絶頂より半腹に至るまで、皆、白雪を纏^{まと}ふ。東北も亦た一山の戴くものあり。遠く望眼に入る。嵩山も亦た雪ありて、粧、枯草の間に点綴す。霜の如きに過ぎず。蓋し其の絶頂に非ざるを以てなり。山神の賜たり。欣躍に堪へず。二十町。山下に抵^{いた}る。芦岩寺あり。觀るべきものなり。河南省開封府は古の大梁の地なり。鄭衛宋の三国の界にして、北方に黄河、西南に山脈、横たはり亘る。其の他の地勢は、広坦にして涯なし。河南府は即ち洛陽の西南なり。山を帯びて洛水柴回し、東に向ひて流る。地、故蹟多く、風景頗る佳なり。然れども亦た甚だしくは奇なるものなし。此の際、最も觀るべきものに嵩山を推す。嵩山は登封に在り。中嶽廟より東北三十丁許に芦岩寺あり。寺の左より西北して山に攀^{よち}る。頗る峻たり。左右に大壑あり。之を望むに甚だ深遠たり。三十丁なるべし。道路は大壑の相ひ合ふの頂に在り。僅に足を容るるべし。風来る毎に唯だ顛墜の懼れあり。勇を鼓して進む。大岩の上より覆ひ圧するに逢ふ。甚だ險なり。郷導者^{郷導者}、路なしと称するも、余、聴かず。岩下に抵^{いた}るに果して路なきものの如し。石上に坐して蒸餅を吃ふ。立ちて之を窺ふ。石を攀^{よち}

りて往来するの跡あり。因りて皮履を脱ぎて之に攀る。郷導者を魔きて登ること数十歩。乃ち巖を過ぐるを得たり。此より山に傍ひて、東北のかた行く。十四五町。絶壁より上ること三次。道路の壁より距つること二二尺に過ぎず。一方は亦た甚だ狭し。人をして凜然として目眩み股慄へしむ。更に進むこと三町許。地、稍や凹す。方一町半なるべし。西南の面、風を受けず。茂草あり。更に三四町。一高処に出づ。以て絶頂と爲す。而して其の東北一町許に更に高きものあり。是れ最高山頂なり。山の頂上は広き七八間。中央は石を盤して台と爲す。石級を設く。然れども大半は崩壊し、乱石充斥す。其の中に一石碑の倒れて中身の折るものあり。何れの世の建つる所かを知らず。年号を聞せんと欲するも、微雪、其の上に点して凍結し見るべからざるなり。東北の二面は大岩の絶壁にして窺ひ見るを得ず。四五間東に乱石の並峙して剣の如きあり。台地より高きこと数尺。躍りて石間に至る。石を抱きて立つ。長風、袂に吹き、凜然として久しく立つべからず。再び故の処に帰す。其の広さ一千半なるべし。外は尽く絶壁なり。復た足を容るるの地なし。一步を誤れば、則ち首足塵粉たらん。立ちて四顧するに、山脈、北に至る。五六町外。亦た高処あり。此と殆ど相ひ比するものなり。漸く低く北に至る。更に一高処あり。西南のかた数百仞の絶壁あり。削らるるが如し。猿猱も攀るあたはず。東面に縁りて稍や斜めなり。草色、目に入る。東南より西北に至るを遙望するに、地、頗る広く、岡阜多し。東西三四里、南北二三里なり。東南に二三の山の重なるあり。復た甚だしくは大ならず。

其の他は皆、平野に係る。西南に山、頗る多し。

(1) 底本は「嵩山」の下に「山」字がある。文意により消去した。

(2) 行軍などの時の案内をする者のこと。

(3) 石づくりの階段のこと。

(4) 滴ち広がること。

(5) ふるえおののくこと。

(6) こなごなになること。

(有馬)

東南のかた遠望するに、潁水西南より来り東南に向ふ。日に映え曠野の間に明滅す。恰も銀蛇の多く走るものの如し。西方、蓮花諸山の重疊するを近望す。更に大室山・少林寺の歴々目に入る。達磨面壁の処は其の西の山腹に在り。風景絶佳なり。其の西に更に一大山の遠く眼に入るものあり。中嶽廟と東嶽廟と、其の規模を比するに、殆ど曲阜の孔廟に譲らず。老柏地に満つ。其の間に多く石碑を建つ。登封県治城、東のかた里許にあり。県治城の西北里許に嵩陽書院あり。広さ三四十千、長さ之に倍す。漢封柏に囲まる。十余宇あり。人の講学する者なし。此れ、五代の創る所に係りて、乾隆に及びて、再興せらるると云ふ。漢封柏の一樹は、囲十二三步。枝は枯ること少なし。一樹は二十三四歩、中空には四五人を容るべし。是れ極めて古の物なり。然れども枝葉扶疎し、枯枝多からず。高さ五六丈に過ぎずして、横は方五子に敷す。清の鄭来詩に「夏王入山曾瞻視、周公卜洛定撫摩(夏王山に入りて曾て瞻視し、周公洛を卜して定めて撫摩す)」と云へるあり。想ひ見るに、自今数百年、当に色を

交ぜざるべし。二樹の下に小板を釘うちて、書して曰く、「漢封の三柏を傷損したる者は、重く処すべし」と。三柏を觀ず。傍らに五葉の松の合抱許なるものあり。蓋し亦た、漢人の植うる所ならんと云ふ。門前の左に大なる石碑を建つ。唐の天室中に建つる所なり。道士の功德を頌す。西して、十里鋪に到る。又た一村あり。刑家鋪と曰ふ。其の東北に大台寺あり。又た其の北に漣川寺あり。柏樹最も多く、鬱蒼として愛すべし。十里鋪より蓮花山下を過ぎ、下より之を窺ふに。峻絶たること嵩山を髣髴す。郭家に投宿す。此の際、路に石多し。余、急歩し足痛むも、体勞を覺へず。蓋し一心に奇を探るを欲すればなり。

(1) 河南省登封県太室山の南麓にある書院。書院とは、唐代に作られた国立の學問研究所のこと。宋以後、公私立の學校を指すようになつた。

(2) 柏の一種。漢柏のことか。

(3) ひとかかえ。

(4) 西曆七四二—七五六。

(真銅)

【訂正】

7号頁数行数	誤	↓	正
2下2	層門を	↓	幾層門を
2下2	東に木門あり。	↓	東の木門も、
2下13	木を用て造らる。	↓	木を用て之を造る。
2下13	之が上に	↓	上に

2下21	龍柱なし。	↓	多く龍柱なし。
4下3	其の下は	↓	其の基は
4下9	くるの意、	↓	くるの意思、
4下11	行きて	↓	往きて
4下22	今、七十世に至る	↓	今に至るまで七十世
4下22	又た顔子	↓	顔子
7上18	子も出で	↓	子も亦た出で
7下15	する者か	↓	する者あるか
8下2	西に進む	↓	南に進む
9上22	里」と曰ふ	↓	里」と曰ふ ⁽⁹⁾
9下20	追加	↓	(9) 底本は「四字」を消し忘れる。文意により消去した。
10下2	人、出でて	↓	僕人、出でて
10下4	食す。臥して云へ	↓	食して臥すと云ふ。
10下7	ば乃ち去る。	↓	乃ち去る。
12上8	菊華	↓	菊華
13下1	昌平城を	↓	昌平城趾を
13下8	許なるべし	↓	なるべし
13下8	河を過ぎ	↓	河を過り
13下8	河を過ぎず	↓	河を過らぬ
14上6	これに称ふ	↓	之に称ふ
15上21	共に生う	↓	共生す
16上9	甚だ多し	↓	甚だ衆し

16下10	これを飲す	↓	之を飲す	17下5	抵るまで	↓	至るまで
16下23	大いに	↓	尤も	18上1	なり。	↓	あり。
17上4	これを食す	↓	之を食す	19下24	西北を遙望むに一	↓	西北に一長堤あるを
17上13	作すと欲す	↓	作さんと欲す		長堤あり。		遙望す。
17上20	早起し	↓	早起す。	21下9	世祖のみ	↓	世祖あるのみ
17上21	湯なし	↓	湯水なし	21下13	じきなり	↓	じからざるなり
17下1	状となす	↓	状たり				
17下4	架くる葡萄棚を	↓	葡萄を架くる棚を				

ありま・たくや(総合科学部助教)
しんとう・まさひろ(同志社大学文学部助教)

会員募集

徳島大学国語国文学会は、国語国文学・中国文学・国語教育の研究ならびに会員相互の親睦をはかることを目的に、昭和六十二年十月に発足しました。最近、日本語教育の分野も加わり、研究会年二回、機関誌発行年一回、会報発行年二回の活動を続けています。会の趣旨に賛同なさる方なら、どなたでも御入会になれます。会費は三千円(年間)。別に入会金として二千円をいただきます。

会員の著書・論文の紹介

会員の方で、国語国文学・中国文学・国語教育・日本語教育関係の著書や論文など

を御発表になった場合には、本学会に一部御寄贈ください。誌上で紹介いたします。なお、論文の場合は抜刷またはコピーでも結構です。掲載文献・出版社・発行年月日を明記してください。

編集部より

◇次号(第10号・平成九年三月発行予定)は、学会創設十周年の記念誌として、国語教育の半特集を組む予定である。教育現場で御活躍、あるいは活躍しておられた、多くの会員の方々からの投稿をお待ちしたい。原稿の締切は、今号に限り平成八年十二月十五日とする。ただし、執筆予定の方は六月十五日までに御一報いただきたい。採否

については、編集委員会で決定する。

◇投稿原稿のなかに図版を多用するものがあるが、いずれの場合も写真製版にするので、原版を必ず添えられたい。

また論文全体を写真製版にすることも可能である。現在横書きの論文に限って掲載しているが、標題などの割付けに多少の不揃いがある点はお許しいただきたい。

◇「会報」第21号も、増頁して記念号とする。こちらは、第一特集「学会の十年」、第二特集「教育学部から総合科学部へ」という企画を組んでいる。この十年を振り返り、今後の学会のあり方を考えたい。連絡板や短信は従来通り。最近、依頼しても御返事いただけない場合が多くて困っている。